

第6学年国語科学習指導案

日 時 平成18年11月9日(木)5校時

場 所 遠野市立青笹小学校 6年教室

児童数 21名

授業者 佐々木 夕美

- 1 単元名 学習したことを生かして
教材名 「海の命」 (物語)

- 2 単元について

- (1) 児童について

児童はこれまでに表現が工夫されている言葉や会話文から、人物の心情を想像し、内容を読み取る学習をしてきた。「カレーライス」では、大事な文章を視写・書き込みしながら人物の心情を考える学習を重ねてきた。これらの学習を通して、登場人物の言葉や行動からその人物の心情を推し量ったり、題名にかかわる言葉に着目して主題を考えようとする意識はしだいに育ってきている。手がかりとなる言葉は見つけられるようになってきており、大事な言葉に立ち止まり、書き込みをしながら考えを深めていく力は、少しずつ身につけてきたと思われる。

しかし、手がかりとなる言葉を見つけても、その言葉を部分的に捉えるだけで、場面の枠を超えた大きく読むことにつながらず、読みが浅くなる児童も見られる。

したがって、登場人物の言葉や行動から、物語全体で捉えなければならない人物の生き方や考え方を読み取る力は不十分だと言える。中学校に進学するにあたって、学んだことをどのくらい生かして自分の力で作品に向き合えるかも大きな課題である。

- (2) 教材について

本単元は、「児童が自らの力で教材と取り組み、今まで学んできた方法を生かして、楽しみながら自分なりに学習する」ことをねらい、教材化されたものである。これまでの学習経験を踏まえて、主体的に学習方法を工夫して取り組むことを想定し、これにより今までの学習経験を再確認するものである。

「海の命」は、6つの場面で構成されている。1の場面は、少年太一の海に対する熱い思いと、村一番の漁師でありながらそれを誇ることのなかった謙虚な父の姿、その死とクエの存在が描かれている。2の場面は、父の死を乗り越えようと、与吉じいさの弟子入りする太一と、太一の成長を期待しながら練達した仕事ぶりを見せる与吉じいさの姿が描かれている。3の場面は、村一番の漁師としてたくましく成長した青年太一の仕事ぶり、与吉じいさの死を父の死と同じく自然への回帰と受け止める、太一の内面的な成長が描かれている。4の場面は、父の命を奪ったクエを自分の手で捕らえ、父を乗り越えたいという思いから、母の制止を聞かずに瀬に潜る太一の姿が描かれている。5の場面は、少年のときから追い求めてきたクエに直面した太一が、クエを殺さずに生かすことを選ぶまでの葛藤と成長が描かれている。6の場面は、太一自身が父となり、海の命を守り続けた生き方が描かれている。

それぞれの場面を貫いて流れるものは、一人の少年の父親たちが生きた海に寄せる熱い思いであり、父の死を乗り越え、父をしのぐ漁師を目指した成長の姿である。そして、自分の命は自分

ひとりの命であると同時に、多くの命のおかげで生かされている命である。つながり合って生かされる命の尊さが作品から感じられる。また、作品全体から、人物の心情を捉える学習をするために適した作品であると言える。

(3) 指導にあたって

児童は、これまでの文学的文章の中でも、人物の行動や言葉、情景描写などから心情の変化を読み取る学習を重ねてきている。これまでの学び方を振り返り、自分たちで学習したことを活用しながら、心情を読み取る力をさらに高めていきたい。

課題解決のために、まず視写文を自分で選択することにより文章理解を深めさせたい。また、その選んだわけを発表させることで、より課題に迫った話し合いを仕組んでいきたい。

まとめの書く活動では、一度自分の言葉でまとめたものを友達の発表後にもう一度見直すという2段階の書く活動とすることで、読みをさらに確かなものにしたい。

3 単元の目標・評価規準（本教材分）

作品を読んで感想や課題を持ち、これまでの学習を振り返りながら自ら読み進め、言葉を手がかりに自ら考える力を高める。

- ・登場人物の心情や場面についての描写など、優れた叙述を味わいながら読み、自分の考えや感想をもつ。（読 ウエ）

4 単元の指導・評価計画（本教材分）（6時間）

- 5年 本に親しみ、人間を見つめよう「新しい友達」
人物の考え方や生き方をとらえよう「わらぐつの中の神様」
学習したことを生かして「大造じいさんとガン」
- 6年 本に親しみ、自分と対話しよう「カレーライス」

次・時	学習目標	学 習 内 容	評価規準
一次1	<ul style="list-style-type: none"> ・全文を通読し、感想を書くことができる。 ・全体の構想をつかみ、学習計画を立てることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中心の人物や出来事をおさえ、題名につながることを考えながら、感想を書く。 ・感想をもとに、学習課題を設定し、学習計画を立てる。 	(関)(読)作品のあらすじをとらえることができ、学習の方向性がわかる。 ノート・発言
二次2	<ul style="list-style-type: none"> ・太一の海に対する憧れと、父の海に対する考え方を読み取ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「漁師になる。」「出るんだ。」等、言い切りの強調に着目し書き込みをする。 ・「海のめぐみ」「父は少しも変わらなかった。」等、父の言動に着目し、父の海に対する考え方を読み取る。 	(読)太一の言葉から海への憧れを、父の言葉から海に対する考え方を読み取ることができる。 ノート・発言
3	<ul style="list-style-type: none"> ・与吉じいさとのかわりを通して 	<ul style="list-style-type: none"> ・「千びきに一びきでいいんだ。～」 ・「おかげさまでぼくも海で生きられ 	(読)与吉じいさとのかわりを通して、たく

	だじ のい ださ るか うら	て、たくましい 漁師に成長して いく太一の姿を 読み取ることが できる。	ます。」等、会話文を通して、た くましい漁師に成長していく姿を それぞれの言動に着目して読む。	ましい漁師に成長して いく太一の姿を読み取 ることができる。 ノート・発言
4	殺 さ太 な一 かは んな たぜ のク だ工 るを う	・父が死んだ瀬に 潜り、クエを生 かすことを選ぶ 太一の心の変化 とその意味を読 み取ることがで きる。(本時)	・「とうとう、父の海にやってきた のだ。」「青い宝石の目・ひとみは 黒い真珠」「太一は泣きそうにな りながら思う。」「この海の命だと 思えた。」等の文から、クエも自 分もこの海に生かされていると感 じ、クエを生かすことを選んだ心 の変化とその意味を、太一の目に 映ったクエの様子と太一の行動と のつながりをおさえながら読む。	(読) 太一の心の変化と その意味を太一の目に 映ったクエの様子と太 一の行動に着目して読 み取ることができる。 ノート・発言
5		・海の命を守り続けた太一 の生き方を考え、主題 をまとめる。	・「太一は村一番の漁師であり続け た。」「海の命は全く変わらない。」「 太一は生涯だれにも話さなかつ た。」等の文から、海の命を守り 続けた太一の生き方を振り返り、 自分の考えをまとめる。	(読) 太一の生き方を振 り返り、主題について 自分の考えをまとめる ことができる。 ノート・発言
三次 6	・同じ作者の本や命にかか わる本について交流す る。	・「山のいのち」を読んで、それぞ れが考えたことを交流し合う。他 の作者の本でも命の大切さや人や 自然とのかかわりについて読んだ ことがあるものを交流し合う。	(関)(読) 同じような 主題の作品を読んで、 命について考えを深め ることができる。 発言	

6年 学習したことを生かして「今、君たちに伝えたいこと」「生きる」
 中1年 新しい世界へ「にじの見える橋」
 自分を見つめる「少年の日の思い出」

5 本時の指導

(1) 本時の目標

クエに海の命を感じ、クエを生かすことを選んだ太一の心の変化を、太一の目に映ったクエの様子と父や与吉じいさの考えとを結び付けて読み取ることができる。

(2) 仮説とのかかわり

ア 手立て 「書く活動」にかかわって

【とらえる書く】

学習課題は、書き込みの時間を十分に確保するために、家庭学習の中であらかじめ書かせておく。課題を一斉読し、発問で揺さぶりながら課題を明確に捉えさせる。

【わかり合う書く】

手がかりをもとに書き込みをする。事前に選んだ文章を視写させておき、書き込みに十分時間がとれるようにする。書き込みの仕方は、太一の視点になって書かせ、太一の心情に寄り添えるようにする。段落のつながりからも考える力をつけるために、太一は父や与吉じいさのことを思い出し、絡めながら書き込みをさせるよう支援する。

【見つめ直す書く】

課題に対してのまとめを自分の言葉で書かせる。書く前には、板書で振り返り、学習のポイントをおさえるようにする。まとめを発表させた後に自分の書いたものを見直させ、推敲させることで深い読み取りにつなげる。

イ 手立て 「支援や評価」にかかわって

「わかり合う書く」で書いたことが話し合いで生かされ自信を持って発言できたと思えるようにしたい。そのために、机間指導の中で、書き込みの内容をチェックし、指名に結びつけられるようにしていきたい。

「見つめ直す書く」で書いたことについては、ノートを集め、本時の目標に照らし合わせて評価をする。教師からのコメントを添えて返すことを大事にし、達成感を抱かせたい。

(3) 本時の展開

過程	学習活動	指導上の留意点	評価と支援
とらえる 2分	1 学習課題を把握する。 太一はなぜクエを殺さなかったのだろう。 【とらえる書く】 目的意識	・学習課題は、書き込みの時間を十分に確保するために、家庭学習の中で書かせておく。 ・課題を一斉読し、課題を明確に捉えさせる。	・本時の課題がわかったか。 観察
見通す	2 音読する。 3 手がかりをおさえる。	・課題について考えながら指名読させる。 ・クエの様子とクエに対しての太一の気持ちが表れている文を確認する。 ・家庭学習で、どこの文を視写してきたか理由も加えて発表させる。 ・前時までに学習した太一のクエに対する気持	・太一のクエに対する気持ちが表れている文を見つけることがで

7分		ちと比較しながら、本時のクエに対する気持ち強く表れている文を確認する。	きたか。 発言
読み深める 30分	4 太一の心情を読み取る。 ・書き込み 【わかり合う書く】 自己解決力 ・話し合い 【わかり合う書く】 有用感	・太一の思いとして書き込ませる。父や与吉じいさのことも念頭におき書き込めるようにさせる。 ・「全く動こうとはせず」「おだやかな目」「自分に殺されたがっている」に着目させて、穏やかなクエの様子を読み取らせる。 ・「ふっとほほえみ」「もりの刃先を足の方にどけ」「えがおを作った」「おとう」「海の命」に着目させて、父の命を奪った瀬の主さえも、父と同じように海の命だと思えた太一の成長を読み取らせる。	A 太一の変化をクエの様子だけでなく、父や与吉じいさと結び付けて書き込みをしている。 B 太一の心の変化をクエの様子と結び付けて書いている。 C への支援 クエの様子と太一の行動を照らし合わせさせる。 ノート・発言
まとめる 6分	5 本時のまとめをする。 【見つめ直す書く】 内容理解	・学習をふり返ってわかったことをまとめさせる。友達の考えから学んだことも加えさせる。 ・学び方、感想も書かせる。	・友達の考えに学び、読み深めることができたか。 ノート・発言

(4) 本時の評価規準

太一の心の変化を太一の目に映ったクエの様子に着目し、父や与吉じいさの教えや死と照らし合わせて読み取ることができる。

具体の評価規準

- A 穏やかなクエの様子と葛藤する太一の思いや行動に着目し、父や与吉じいさとも関わらせながら心の変化を読み取り、海の命にもふれながら自分の考えを書いている。
- B 穏やかなクエの様子と葛藤する太一の思いや行動に着目し、父や与吉じいさとの関わりも捉えながら、心の変化を読み取ることができる。
- C (努力を要すると判断する児童) への支援

太一の想像していたクエと実際のクエはどうであったか、太一を葛藤させたのはクエのどんな様子からかを考えさせる。父や与吉じいさとの関わりも捉えさせる。